震災後の調査提言活動を通じて考えたこと

2012 年度（第 90 期）会長　金子 成彦

東日本大震災の直前に筆頭副会長に選出して頂き，翌年，第 90 期会長を務めさせて頂いた小生は，筆頭副会長，会長在任期間中に，「東日本大震災調査報告書」を纏めるとともに，関連他学会と一緒になって提言活動に時間を掛けました．調査提言活動を通じて小生は多くのことに気付きました．

その一つに，日本は戦後の急成長によって生活の豊かさや利便性を向上することには成功しましたが，人工物がもたらす負の側面やリスクに関しては，専門家と市民との間には十分なコミュニケーションがとれていたとは言えず，ある意味，発展を急ぎすぎた国だったということが挙げられます．この問題を解決するための糸口を見出すために学会が果たせること，それは，工学者に自分の専門領域を越えた俯瞰的な見方を身に付けさせる体験や機会を提供することだと思いました．そもそも学会は専門分野に関する最新情報を持った人々が集う場所であり，最新のデータに基づいた議論ができる場です．また，学会は年代を越えた技術者や研究者によって構成されており，過去のデータも扱うことができる集団です．したがって，これからの学会は，仲間内に向けての発信だけでなく，市民に向けての発信機能を併せ持つ集団に変わって行くべきと考えます．ただし，市民向けの情報発信活動は，正確さと迅速さが求められるため，その役割は現役世代だけが担うものではなく，日本の人口のボリュームゾーンを形成している 65-75 歳までのアクティブシニアの参加を得て内容の充実を図るべきと考えます．また，これからの工学者には，アイデアを形にする創造的活動だけでなく，社会実装の重みを感じさせる経験も積ませるべきで，それによって，様々な立場に立って考えるという発想を植え付けることができると考えます．一市民の側に立って考えることが習慣として身に付くように，学校教育の中でも科学技術リテラシーの時間を取って，リスクに対する説明や合意形成の方法を教えるべきと感じた次第です．

さて，2012 年 9 月に学会と市民をつなぐ情報発信活動に関する調査を目的として英国機械学会を訪問する機会を得ました．英国機械学会は，英国土木学会と並んでバッキンガム宮殿からそれほど離れていないウエストミンスター地区に建物があり，存在感を示しています．しかし，事務局長さんの説明によって，その存在感は，市民への発信という形でより具体的に実現されていることが分かりました．英国機械学会は，毎年，ポリシーステートメントという冊子体を発行しています．内容は，様々で，その時に話題となっているテーマについてパブリックステートメントという形で 4～5 年前から市民や行政に向けての発信が開始されていました．驚いたことには，機械工学の重要性を市民に浸透した度合いを測るために，英国機械学会からの発信がどのようなメディアに取り上げられたかを定期的に調査しており，これは Voice of the Profession という名前のデータ集として纏められています．改めて，成熟社会における学会の果たす役割を考えさせられた訪問でした．日本機械学会もいつかこのような情報発信活動ができる団体になりたいものだと思いつつ帰国の途に就きました．

© 2017 The Japan Society of Mechanical Engineers

英国機械学会発行のデータ集 VOICE OF THE PROFESSION

英国機械学会の Stephen Tetlow 事務局長とともに

参考文献

（1） WEB MAGAZINE SINKAWA Times

http://www.shinkawa.co.jp/times/column/s-kaneko/vol005_no06_col02.html

http://www.shinkawa.co.jp/times/column/s-kaneko/vol005_no07_col02.html

http://www.shinkawa.co.jp/times/column/s-kaneko/vol005_no08_col02.html

© 2017 The Japan Society of Mechanical Engineers